審査の結果の要旨

氏名 稲井智義

本論文は、1880年代後半から1930年後半にかけて、児童福祉の制度化を担い、児童福祉の施設と研究の開拓に尽力した3人の人物、石井十次、冨田象吉、高田慎吾の思想と実践を、時代背景のなかで分析し、検討したものである。

石井十次は、岡山孤児院を1887年に創立、1907年に大阪で初めてとなる愛染橋保育所を設立した。冨田象吉は1907年12月に岡山孤児院の職員となり、石井が始めた大阪での保育所と夜間小学校を担い、1916年に岡山孤児院から独立した石井記念愛染園の代表を務めた。高田慎吾は石井記念愛染園に1918年に附設された救済事業研究室の最初の研究員となり、同研究室をもとにして1919年に独立した大原社会問題研究所で子ども問題研究を続けた。このように、3人は、岡山孤児院から石井記念愛染園が生まれ、石井記念愛染園附設の救済事業研究室から大原社会問題研究所が生まれるという一連の流れのなかにあって、近代日本における児童福祉の制度化の一つの系譜を形づくっている。

第一章と第二章では、石井十次の教育思想が、家族と国民教育という二つの側面から明らかにされる。その際に特に、石井の教育思想と岡山孤児院での養育と教育の変遷が、1890年代から1910年頃までの日本における近代家族観の形成や近代公教育体制(国民教育制度)の構築という文脈に即して検討されている。

第三章から第五章では、石井が大阪で1909年に設立した保育所と夜間小学校を引き継いだ冨田象吉の教育思想を初期・中期・後期に分けて、育児事業と社会政策、子ども救護という三つの側面から検討している。そこでの冨田の教育思想と活動が、1900年代から1930年代までの日本における孤児院と保育所の関係変容や、大阪市での公立小学校の普及と不就学、および保育所法令化をめぐる論争の推移という文脈と密接に関連していたことが明らかにされている。

第六章では、冨田と同じく大阪で、子どもに関する社会問題を研究した高田慎吾の教育思想を明らかにし、高田の教育思想の特徴として、女性の労働問題として保育の問題を位置づけたことが指摘される。特に、高田が、教育の論理の規範化に還元され得ない、働く女性の余暇拡大と教養形成の両方を保障するものとして保育を位置づけた点を、石井や冨田をはじめとする児童福祉思想にみられない特質として評価する。

以上を通じて本論文は、アリエス以降の社会史研究における近代教育批判のモチーフを受け継ぎつつ、近代日本における児童福祉の制度化が救済事業から社会事業へと展開、発展していく過程に、子どもの保護や母性主義、国家主義を中核とする教育の論理が浸透していく一端を明らかにした。と同時に、そこには高田のような、教育の論理の規範化に還元され得ない働く女性の余暇拡大と教養形成への視点が見られたことを指摘することで、近代教育批判の論理を超えるてがかりを見いだしている。以上の点に本論文の学術的意義が見いだされ、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものと判断された。